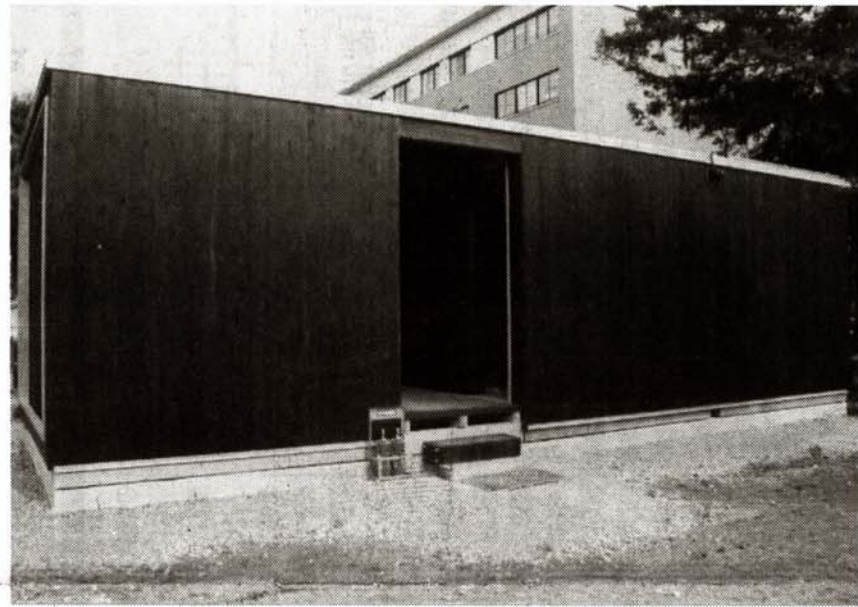


北部構内に謎の建造物出現？

正体は新しい建築モデル「J・Pod」



四月に吉田キャンパス北部構内、旧演習林本部事務室の脇に突如現れた建築物。外観は木造の黒い大きな箱。実はこの建物、フィールド科学教育研究センター(フィールド研)を中心としたチームが推進する、森林を管理する段階で切り出される間伐材を利用した新たな建築モデルの実験棟「J・Pod」なのである。

同型の「J・Pod」が四月三十一日、フィールド研和歌山研究林(和歌山県有田郡)にも完成した。北部構内の実験棟では、教室としても週一回程度利用されている。

「J・Pod」は、京都大学の地球環境学堂と湧池組らが共同開発した新工法の建築。「木造モノコックユニット」と呼ばれるこの建築は、太い柱や梁(はり)を用いた通常の建築とは違い、小型の木材

を用いた横三・六メートル、縦二・七メートルの長方形のフレームが基本構造となっている。工場で量産するフレームを現地で四十五センチ間隔に並べ、木壁を組み合わせることで、木壁を組む手間を省き、短い工期で完成するほか、建築・解体に専門的な技術はほとんど要しない。さらに、一〇平方メートルのユニットを連結していくことで二次元的・三次元的な建築を行える。一戸建てから集合住宅、または体育館まで造ることができ

平方向への外圧にも対応している。

ほとんどの構造が通気性に優れた木材で作られているため、防湿性にも優れている。壁との間に断熱材を入れたり、積雪対策のための屋根を付けるなど、日本各地のさまざまな気候の中でも快適さを保つことができる。状況に応じてアレンジが可能な点に、単純な構造ならではの強みがあるといえる。

田中克・フィールド研センター長は「今の山は密植された人工林で手入れもされないが、建築材料には熱帯の森林資源を使っている。防災の観点からも日本の木を循環させることが大事。日本の気候風土に合った木造建築の普及を考えたとき、『J・Pod』の方式がその理念に合致した。大学でしかないやり方として、京大の所有する演習林の木を使って構内に木造校舎を建て、森の再生という理念を発信していきたい」と語っている。中ではゼミも行われ、学生からも好評を得ているという。

(三面に関連記事)

「j. Pod」の挑戦

～森と都市とをつなぐ～

北部構内に現れた実験棟「j. Pod」。新工法の特徴や利点、そして計画のねらいとは。開発の経緯や、この計画と環境・社会とのかわりについて、開発に携わった小林正美教授に伺った。

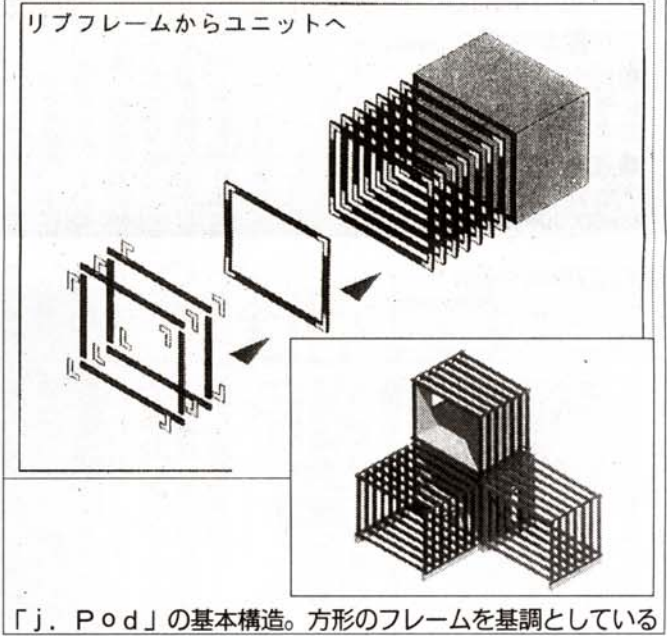
■演習林発の社会貢献

「j. Pod」は、建材に大木を使う伐材を使う方法がなければならぬ。日本では、伐材を使う方法がなければならぬ。日本の森林の衰退も、建築の工業化に伴い進んだ。安価な外国産の木材が多く使われるようになり、林業では間伐が放棄され、多様性に富んだ本来の森の姿が失われている。「日本の木は質的にもよいものである。林業が成立するためには、日本産の木材を使わなくてはならない。林業計画の中に、明確な使い途とそれにかかる経費までを含め、森と都市をつなぐ「循環型木造ビルディングシステム」のモデルが「j. Pod」である。



大学院地球環境学
小林正美教授
(人間環境設計論)

フィールド研の田中克教授(同センター長、竹内典之助教授らとともに)、「京大の演習林の木を使ってできないだろうか」と相談し、「木文化再生研究会」を結成。総長に働きかけ、法人化後設けられた「総長裁量経費」を利用して実験棟の建築を遂行に移した。「経費の獲得には、田中さんがよくがんばってくれました。これからは困るかもしれません。」



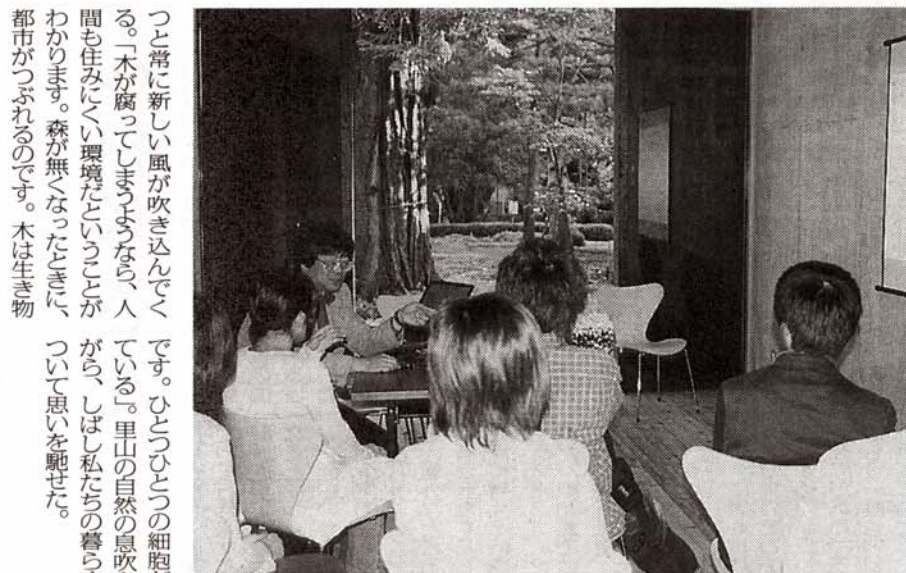
「j. Pod」の基本構造。方形のフレームを基調としている

■「直す文化」の再建へ

「j. Pod」という名前の由来について聞くと、「特に意味を込めたわけではありません。何とか工法とか長い名前ばかりにいいというだけ。Podは豆のちやのような形状を模しています。JはJohnのJとか、JapaneseのJとか、開発に関わったJohn Barr Architectsという会社のJとか、様々です。本当は京大のKを取って「k. Pod」が望ましい。すでにアップルコンピュータの「i. Pod」の「i」から、J、五年の阪神・淡路の地震よりも震度

■木の温かみを感じる

「j. Pod」の応用については「プレハブのように建築が容易で持ち運びに優れている点から、震災時の仮設住宅としての利用を試みています。兵庫県に『グループハウス』という同居老人の共同住宅を造りました。「j. Pod」ではなく、プレハブを改築する形になったのです。冷たいプレハブより、心を包んでくれるのは木造の温かさだと思います」と語った。仮設住宅としての利用は、簡易な工法の利点だけでなく、安らぎも与えられる。今後の展望について聞いた。「j. Pod」は今の実験棟は、京大演習林の木を使えなかつたんです。今後は是非とも演習林の木で作りたい。実験棟でポケット・ゼミの授業を行っている



週に数回、ゼミが行われている。晴れた日は窓を開け、風を通しながら授業を行う。5月10日、北部構内「j. Pod」にて

「j. Pod」のコンセプトは「森と都市との対話」である。実際に入ってきた。内部は木壁に反射したやわらかい光に包まれており、フロアの質感が足にあたたかく、落ち着いた空間を作りだしている。窓を開け放つと常に新しい風が吹き込んでくる。木が腐ってしまうのなら、人間も住みにくい環境だということがわかります。森が無くなったときに、都市がつぶれるのです。木は生き物

(税)